

## 論文内容の要旨

A survey of patients who received psychiatric emergency outpatient services for physical complaints

(身体的愁訴を主訴として精神科救急外来を受診した患者の実態調査)

(水谷歩未, 遠藤仁, 大塚耕太郎, 大沼禎史, 志賀優, 小泉文人, 佐藤広隆, 本多笑奈, 中村光, 酒井明夫, 遠藤重厚)

(Journal of Iwate Medical Association 68 巻, 4 号 平成 28 年 10 月掲載)

### I. 研究目的

身体的な症状にてプライマリ・ケアを受診する患者においても、半数以上は器質的疾患を有さず、心理社会的な背景が存在すると報告されている。

身体症状や身体的愁訴に関する上記のような問題を解決するためには、身体的愁訴の背景にはどのような精神的要素や精神疾患が存在するのかを考える必要がある。そのためには、身体的愁訴について身体と精神両面から医学的検討を加える場での調査検討が必要である。

これを実践するためには、精神科医が常駐する身体科救急の現場で、身体的愁訴で精神科救急を受診する症例について、その精神科的背景を調査し、身体疾患との鑑別を行っている実態をとらえるのが最も効果的と考えられる。

本研究では、岩手県高度救命救急センターと岩手医科大学附属病院一次二次救急外来において、身体的愁訴を主訴として精神科救急外来を受診した患者について、1) 各身体的愁訴の詳細や背景因子、2) 身体的愁訴と各精神疾患との関連、3) 症状ごとの身体・精神面での対応の実態、4) 身体的愁訴への精神科・身体科救急対応における今後の課題を明らかにすることを目的とした。

### II. 研究対象ならび方法

2004 年 4 月 1 日から 2012 年 3 月 31 日までの 8 年間に、岩手県高度救命救急センター(以下「センター」)及び岩手医科大学附属病院一次二次外来(以下「1 次 2 次」)を受診した 13,990 件(センター 3,077 件, 1 次 2 次 10,913 件)を母集団とした。その中で、身体的愁訴を呈する患者 4,883 件を本研究の対象とした。

本研究では「身体的症状を訴え受診したが本人が精神科の診察を希望した、もしくは精神科を受診へと振り分けられた患者」を、身体的愁訴を呈する患者と定義し、国際疾病分類に基づいて計 14 項目の身体的愁訴に関して調査した。また、背景因子として、性別、年齢、窓口区分、新来区分、通院先の有無、診断を調査し、受診後対応として、処置内容と救急外来における転帰を調査した。

精神科診断に関しては国際疾病分類第 10 改訂版「精神および行動の障害」に基づき、F0～6, G40 およびその他に分類した。処置内容は、向精神薬投与、向精神薬処方、精神療法、身体的処置の 4 項目を、それぞれ実施したか否かを調査した。

センターおよび 1 次 2 次において「救急外来患者受付情報用紙」を用い、上級精神科医 1 名(精神保健指定医)のスーパービジョンの下、2 名の救急担当精神科医と、当院の 11 名の精神科当直医により各項目の記載と評価が行われた。

患者の特徴を明らかにするため、各身体的愁訴のうち、200 件以上の 7 項目を従属変数、背景因子や受診後対応を説明変数として、多変量ロジスティック回帰分析(強制投入法)を行った。

統計処理は SPSS 21.0 J for Windows を使用した。データは個人が特定可能な項目は除外し、データの管理やその過程でも個人情報保護に配慮した。本研究は岩手医科大学倫理委員会の承認を得ている。

### III. 研究結果

1. 対象は 7 割が女性で、F4 圏の比率が最も高かった(35.5%)。呼吸器系症状は F4 圏(58.1%)、向精神薬の副作用は F2 圏(70.3%)、疲労倦怠感は F3 圏(28.5%)の比率が高かった。
2. 多変量ロジスティック回帰分析では以下の結果が得られた。
  - (1) 神経系症状では、1 次 2 次受診はセンター受診と比較し 0.469 倍( $p=0.000$ )であり、身体的処置は 1.188 倍( $p=0.035$ )、帰宅の転帰は 0.569 倍( $p=0.001$ )であった。
  - (2) 消化器系症状では、男性が女性と比較し 1.267 倍( $p=0.007$ )であり、通院先が当院の場合は 0.586 倍( $p=0.000$ )、他院の場合は 0.663 倍( $p=0.000$ )であった。
  - (3) 呼吸器系症状では、男性が女性と比較し 0.498 倍( $p=0.000$ )、1 次 2 次受診はセンター受診と比較し 0.394 倍( $p=0.000$ )、新患は再来と比較し 2.267 倍( $p=0.000$ )であった。
  - (4) 向精神薬の副作用では当院通院中が 1.840 倍( $p=0.000$ )、他院通院中が 2.443 倍( $p=0.000$ )であった。

### IV. 結 語

精神科救急における身体的愁訴を各診療科領域別に調査した結果、昏迷と意識障害との鑑別の困難さや、通院先不定患者が消化器系症状で不定期に救急外来を再来するといった問題点が抽出された。一方、呼吸器系症状のように、救急外来での適切な対応や日常外来での患者教育を行う事で、救急外来の再来を予防できることや、うつ症状との関連の強さから疲労倦怠感がうつ病診断の精度を高める可能性が明らかとなった。本研究で明らかになった各身体的愁訴と精神疾患との結びつきは、救急の現場ばかりでなく日常外来における診療の方向性にも一定の示唆を与えるものと考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

論文審査担当者

主査 教授 寺山靖夫 (内科学講座神経内科・老年科分野)

副査 教授 井上義博 (救急医学講座)

副査 講師 星 克仁 (神経精神科学講座)

プライマリケアを受診する患者の身体的な愁訴に関しては、その半数以上に器質的所見が見られず、心理社会的要因が存在することが知られている。器質的所見を欠く身体的愁訴の実態を解明するためには、背景に存在する精神的状態像や精神疾患の分析が必要であるが、これについて詳細な検討を加えた報告はまだない。

本研究は、平成16年4月1日から平成24年3月31日までの8年間、身体的愁訴で精神科救急を受診した4883件について、身体的愁訴の臓器別分類、背景因子や精神科診断、既往歴や転帰、救急における対応・処置などについて詳細に検討を加えたものである。その結果、対象の約7割が女性でF4(神経症圏)の割合が高く、神経系症状では意識障害の割合が高く、消化器系症状では通院先不定の若い男性患者が多く、呼吸器系症状では向精神薬投与や精神療法を受ける割合が高く、疲労倦怠感がうつ病と関連性が高いことなどを明らかにした。

本研究で提示された各身体的愁訴と精神的要素との関連性、救急における処置内容や転帰などは、救急の現場における適切な処置や経過予測ばかりでなく、精神科日常診療における方向性についても貴重な示唆を与えるものである。

学位に値する研究である。

## 試験・試問の結果の要旨

精神科救急医療の方法論や、器質的所見を欠く身体的愁訴の意味や意義、精神・身体症状を惹起する心理社会的要因の詳細について試問し、的確な回答を得た。

語学試験にも合格し、学位取得にふさわしい学識と指導力を認めた。

## 参考論文

- 1) Aripiprazole と valproate の併用が有効であった双極性感情障害の1例(水谷歩未, 他9名と共著) 臨床精神薬理 16 巻 7 号
- 2) Predictors for delayed encephalopathy following acute carbon monoxide poisoning(急性一酸化炭素中毒に続く遅延脳症の予測因子について)(工藤薫, 他13名と共著) BMC Emergency Medicine 14 巻 3 号
- 3) Characteristics of suicide completers presenting to an emergency care centre in Japan: A comparison with suicide survivors. (日本における救急搬送された自殺既遂者の特質について: 自殺未遂者との比較に基づく考察)(佐藤瑠美子, 他9名と共著) 岩手医学雑誌 65 巻 2 号
- 4) Usefulness of and Factors Associated with Global Assessment Scale (GAS) Scores in Suicide Attempters(自殺企図者における総合評価尺度(GAS)の有用性と関連因子について)(梅津美貴, 他13名と共著) Journal of psychiatry 18 巻 1 号
- 5) 統合失調症における自殺企図の特質: 救急受診例に基づく検討(肥田篤彦, 他9名と共著) 岩手医学雑誌 64 巻 2 号